

大切なこと

群馬県・渋川市立金島中学校 3年 遠藤 里緒

お金はみんな同じ。今まではそんな風に思っていた。しかし今は違う。稼いだお金と盗んだお金、もらったお金と借りたお金は全然違う。自分のお金と、他の人のお金は全然違う。

私がお金の違いに気づいたきっかけは「募金」だ。まだ記憶にも新しい「東日本大震災」だ。私の中学校では、生徒会が中心となり、被災地に送る募金活動を行った。私は生徒会ではないので、中心的に活動することはできなかった。しかし、もちろん協力はするつもりであった。その頃テレビでは、会社の社長や芸能人が、何千万、何億円もの援助金を寄付していた。お金だけではなく、水分や食料、身の回りの生活用品なども大量に送ったというニュースでどこもかしこも持ちきりだった。私にはほど遠い世界だった。そんな大それたことはできるはずがない。

ある日、新潟の祖父母から電話があった。それは、祖父が被災地でボランティアを行ったという内容だった。「そうか、じいちゃん、被災地に行ったんだ」。私の知らないところでたくさんの人が動いていることを、初めて知った。その後もニュースでは、寄付金を送った以外にも、がれきの^{てつきよ}撤去作業や炊き出しをしたなどという情報が報じられた。自分にはたくさんの寄付金や生活用品も送れなければ、被災地に出向いて、がれきの撤去作業や炊き出しをすることもできない。でも、何か役に立ちたい。強く思った。

^{さっそく}早速募金活動が学校で始まった。そしてその前日に、集金で余ったお金が学校から返された。次の日、学級委員だった私は、クラスの募金を回収した。箱の中をのぞいて見ると、1,000円札が何枚も入っていた。私は驚いた。こんなに1,000円札が入っている募金箱を私は学校ではじめて見た。「自分のお金のかなぁ」と疑問に思った。後々、ある友達から聞いたが、前日に返された集金のお金を親に持って行っていいよと言われた人がいたという話だ。なるほどと私は思った。その日は募金活動初日だったので、私はまだお金は持ってきていなかった。

その日の夜、私はお金をいくら寄付するか考えた。いつもの募金なら、親に、募金をするからお金をちょうだいとせがんでいた。しかし、今回は違った。いくらお金を寄付しようなんて考えたこともなかった。自分でも分からないが、今回は親にせがんだりしなかった。なるべくたくさん寄付したい。でも、自分のお金がなくなってしまう。自分でもビックリするくらい真剣に考えていた。そのとき、その日の学校の情景が思い浮かんだ。そして母に尋ねた。

「昨日学校からもらったお金、募金しちゃダメかな。」

すると母は一言。

「それでいいの。」

考えてみればそうだ。確かに返されたお金を募金すれば、被災地に、より多くのお金が届けられる。でもそれは、自分のお金ではない。その後、母は自分の故郷が大地震にあった時、たくさんお金を出したかったけど、大切なのは金額よりも気持ちだから、郵便局を通じて1万円を寄付したという話をしてくれた。どんなにすごい金額でも気持ちがなければ意味がない。たとえ少ないお金でも、気持ちがこもっているとないじゃ大違いなんだと思った。どんなに少なくとも一人一人が思いを込めて募金すれば、大きなお金になる。「ちりも積もれば山となる」。このことわざが頭に浮かんだ。

私は次の日、募金箱に1,000円札と小銭を数枚募金した。正直、1,000円を募金しようかかなり迷った。私にしてみれば、1,000円も大金に等しい。今までの募金は、5円とか10円だった。「自分のお金だからもったいない」と思うなら、募金しないほうがいと学んだ。学んだからこそ、1,000円札を自分の財布から出したかった。金額は関係ないといったけれど、同じ日本国民が、同じ年代の人たちが苦しんでいるから、自分が出せる精一杯のお金を寄付したかった。もちろん、気持ちもこもっている。

何よりも大切なのは、本当に「頑張^{がんば}ってほしい」と心から思うこと。私はこんなに大切なことに今まで気づけなかった。お金の価値は金額だけで決まるとは限らない。このお金をいいことに使いたい。このお金を何かに役立てたい。そう思うだけで何かが変わってくる気がする。自分が被災地にエールを送るつもりが、逆にお金の大切さ、お金の価値について教えてもらった。今回の募金活動を通して、たくさんのことを学ぶことができた。このことを学んだだけで終わりに

するのではなく、未来の社会が明るくなるような、いいお金の使い方をしていきたいと思う。

一人一人が、お金の使い方・価値について真剣に考える必要があると私は考える。

